

「会員短信 66」

「墓碑銘」

山下正純

万葉乃 孝子桜也 山下仁
集居日々来天 和多留令名
「万葉の 孝子桜や 山下に
集い日々来て 渡る令名」

昨年、父を見送り、松山の御幸寺山のふもとにある龍穩寺さんに、ご縁あってお墓を設けさせていただいた。龍穩寺は鎌倉時代創建の寺で、地元では、旧正月に開花する十六夜桜（孝子桜）でも有名な寺である。その境内には「十六日桜を詠む」と題して、西行法師、一遍上人、芭蕉、一茶、子規、山頭火など数々の俳人の句碑がある。隣のロシア兵墓地にも、波多野二美の詠んだ「永久眠る孝子ざくらのそのほとり」の句碑がある。

冒頭二行は、お墓の創建にあたり墓碑銘としてお墓に刻んだ短歌で、万葉仮名で創作したもの。後の二行は、それを現代の仮名にしたものである。歌意としては、「万葉に茂り、この龍穩寺で多くの俳人に詠まれた十六日桜は、山のふもとの山寺にあり、多くの人がこの桜を慕って日々集い、その令名は世に響き渡る事よ」になる。この歌の中には「万葉集」、家名の「山下」、二人の子どもの名前「響己（ひびき）」と「航（わたる）」、そして元号の令和といった言葉が隠されている。

十六夜桜には、「病の親に一目見せてやりたいと言う子の願いに応じて早春に咲くようになった」との伝説がある。父は既にその墓にあるが、私もいずれは、この十六日桜のほとりにゆくのであろう。